九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

筋骨格ストレスマーカーから復元する身体活動の多様性 ： 日本列島出土の古人骨を用いた縄文・弥生・中近世の 総合的比較

米元，史織

https://doi.org/10.15017/1560374

出版情報：九州大学，2015，博士（理学），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏　　名　：　米元　史織

論文題名　：　筋骨格ストレスマーカーから復元する身体活動の多様性
　　―日本列島出土の古人骨を用いた縄文・弥生・中近世の総合的比較―

区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

本研究の目的は、人骨から活動を読み取る 1 つの方法である筋骨格ストレスマーカー（muscle skeletal stress markers、MSMs)を用いて、生業・生活様式の影響がどのように MSMs にあらわれるのか、その影響のあらわれ方の時代性や地域性を検討し、身体活動の多様性とその通時的変化を明らかにすることである。日本列島出土の縄文・弥生時代および中近世（室町時代・江戸時代）に属する人骨を用いることで、階層化の進行した社会とそれ以前の時代との対比を行うことが可能となり、これにより社会内部の非均質性（inequality）の進展に伴う、集団間・集団内に生じる身体活動の多様性の変化に関する議論を行う。

第 1 章では、上記の研究目的を詳述し、本稿の具体的な構成について述べる。

第 2 章では、先行研究を整理してその問題点を示し、本研究における取り組みについて述べる。これまでの MSMs 研究の多くは､身体活動を復元することをのみを目的とした個別事例研究として蓄積されてきた。しかし、身体活動だけではなく生業様式や生活様式を明らかにするという目的において身体活動の負荷を読みとる MSMs のみの検討はそもそも不十分なものであった｡本研究では､身体活動を人骨形態から復元するだけでなく、考古学や文献史学、文化人類学の成果と総合し、物質文化と自然環境、およびそれらを利用する際に形成される行動パターンと、それが性別や年齢、個人の立場に基づいてどのように異なるのかを検討することで、「活動」・「技術」・「生存のための集団のあり方」の総称としての生業・生活様式の復元を目指した。

第 3 章では、本稿で対象とした集団と分析方法を示す。対象資料は、縄文・弥生時代および中近世の人骨資料であり、その所属時期、年齢構成や出土遺跡の立地などの特性をまとめた。MSMs の観察対象としたのは上・下肢骨に付着する筋付着部 22 部位である。MSMs を含め、生業様式・生活様式を明らかにするために用いた分析方法を述べた。

第 4 章では、先史時代、すなわち縄文時代と弥生時代の検討を行った。考古学や文化人類学の研究成果から、各集団でどのような道具が用いられ、集団間の生業活動にどのような違いがみられるのかを明らかにした。さらに、Murdock（1937）の性別分業の研究をふまえ、各活動が男女のどちらによって担われた可能性が高いかを推定した。そのうえで、対象集団の MSMs パターンの対比を行い、集団間の MSMs の類似と差異の表れ方を男女別に検討した。また、MSMs の男女差や年齢差を分析することで、これまで民族誌などから類推されてきた、性別や年齢に基づく分業・活動区分の在り方を地域集団ごとに検討した。その結果、縄文時代と弥生時代の集団間の MSMs の差、集団内の男女間の MSMs の差や年齢ごとの MSMs の差のあらわれ方は異なるものであった。縄文時代の各集団では男性よりも女性の方が活動の多様性が大きいが、弥生時代では男性の方が女性よりも活動の多様性が大きくなることや MSMs の加齢変化の様相が両時代間では異なるなど､水稲農耕という生業の確立とともに活動の仕方が大きく変化したことが明らかになった。

第 5 章では、歴史時代、すなわち中近世の検討を行った。中近世に関しては文献史学や民俗学的

研究から各集団の行っていた生業諸活動と生産体制を推定した。そのうえで、対象集団の MSMs パターンの対比を行い、集団間の MSMs の類似と差異の表れ方を男女別に検討し、各集団が生業活動に際して行っていた諸活動や生活様式を明らかにした。また、MSMs の男女差や年齢差を分析することで、各集団の性別や年齢に基づく活動区分の在り方を検討した。その結果、集団間の MSMs の差、集団内の男女間の MSMs の差や年齢ごとの MSMs の差は異なり、江戸時代の上位階層である武士層とそれ以外の町人層や百姓層の違いが顕著に析出された。

第 6 章では、縄文・弥生・中近世の全ての集団をあわせて、MSMs の集団間・集団内の差の時代変化の検討を行った。集団間の活動差のあらわれ方、集団内の男女差のあらわれ方や年齢に基づく活動の違いのあらわれ方の時代変化を検討し、集団間または集団内で生じる身体活動の差異のあらわれ方は、時代によって大きく異なり、縄文時代や弥生時代よりも、社会的分業が確立した中世や階層社会である近世の方が身体活動の多様性は大きいという結果が得られた。

第 7 章では、縄文時代・弥生時代・中近世の各集団の道具の組成や文献記録、MSMs の結果を総合的に検討し、各集団の男女それぞれの活動や性別・年齢に基づく活動の区分を述べる。その上で、MSMs の集団間・集団内の差の時代変化のあり方を議論した。その結果、活動によって身分を表徴するあるいは専業化が進展した社会と、基本的には平等で自給自足的な生活をしており、様々な活動を組み合わせて行っていたような社会の集団とでは、MSMs の差異のあらわれ方は異なるということが分かった。またそれは、江戸時代の上位階層において最も顕著であることから、社会内部の非均質性の進展に伴い、身体活動の多様性が大きくなることを明らかにした。このことから、活動の多様性やその差の現れ方には、政治経済的に不均質な関係の在り方が大きな影響を与えることが明らかになった。

第 8 章では、本研究によって明らかにされた結果と考察を整理し、一連の議論を総括し、今後の研究の課題と展望について述べている。